

認識主觀の問題 (承前)

田邊 元

七

前節に於て余は現實意識の rudiments ともいふべき感性的直觀の成立を説き、我的純粹活動意志の純粹作用が非我としての空間的徵標の本質系統と相互制限の關係に於て、自己を個人意識に限定すると同時に後者を他の本質系統との無限に可能な結合の發展的全體の中に於て限定するものなることを述べた。空間的徵標系統は無限に大なる圓の無限に多き中心にも比すべき無限の本質結合の中心を意味し、各の空間的徵標は一の中心が全體に對して有する定位關係、換言すれば一の中心から他の中心への移り行きを意味する。斯かる關係の體系が意志の純粹活動と相互制限に於て直觀的時間の發展の中に限定せられるとき直觀的空間となり、感性的直觀が成立するのである。直觀的空間は現實意識の制約として純粹作用の制限をな

し、一の制限と他の制限、即ち一の現實意識と他の現實意識とを分化せしめるものである。余は個人意識の分化が身體の制約に基くといふことの眞の意味は、此様に直觀的空間が現實意識の成立に對し必要な個人意識の分化に欠くべからざる原理となることに存するのであつて、又空間の本質的意義は意志の純粹活動に對する制限、其部分化の原理たる所にあると思ふ。前節に余が *intelligibler Raum* を説いたのもその意味である。勿論何故に意志の作用結合が空間に由つて個人意識に分化せられなければならないかは、恰も唯一の神が何故に雑多の世界を造つたかといふ問と同じく、説明を絶するものであつて、我々は唯之を経験的事實以前の根本的事實として承認する外無いものである。併しとにかく純粹活動の制限せられる原理として空間の本質を認め、これが個人意識を分化せしめるのであると考へるを要する。心身の相互關係如何の問題の如きも、其解決に際しては之を念頭に置く必要があるのではあるまいか。併しながら翻つて考へると曩に述べた如く、直觀的空間は直觀的時間に於て始めて實現せられるものであつて、之を離れては抽象的可能的たるに止まり、尙夫々固有なる空間的徵標を隨件して現實意識の内容に入り來る各 *Region* の感覺的本質も、亦直觀的時間の發展に於て結合限定せられるのである。純粹作用と

しての意志に結合限定せられる諸作用の結合は不斷の推移をなすものであり従つて之に對應する内容もベルグソンの所謂 *Endosome* の状態に於て直觀的時間の中に人格的統一を保ちつつ進化發展する。而して眞に何等の反省をも含まざる直接の感性的直觀を考へれば、未だ主觀と客觀との對立なく、作用と内容との區別も無い。唯あるものは内容自身の動的發展的統一ばかりである。其故若し表象を以て凡ての反省に先だつ感性的直觀を組成する内容と作用との兩者を指すものとすれば、心理學立脚地から此兩面の區別をなすことは勿論出來るとしても、直接に表象そのものの體驗に於て此兩面の區別をなす事は出來ない筈であつて、況や其作用、内容に對立するものとしての對象を認める如きことは全く不可能でなければならぬ。勿論表象は其作用に對應する志向的内容を通して、更に超越的の對象を意味すると考へることも表象といふ概念の解釋し方如何に由つては出來ることであり、又それが哲學的の反省に先だつて常識の承認する實際の事實によく適合する所もあることは認めなければならぬ。併しながら専ら作用の *Leistung*、それに對應する志向的内容の意味に重きを置きて心的作用を區別規定する立場を採るならば、意識に對立し、之を超越して存立すると考へられる對象を要求することなき、何等の反省を含まざる

直觀の段階に於ける感覺的內容の志向的作用と、斯かる志向作用を豫想して更に其上に該作用と獨立なる對象の存立を要求し、之に關係するといふ意味を含む内容に志向する所の作用とは明に區別せられなければならぬ。表象の概念が前者を意味するならば、それは同時に後者を意味することは出來ず、又若し兩者を表象といふならば、夫々の場合に於て概念の内容が異なるのでなければならぬ。余は第一の場合、即ち反省を含まざる直接の感性的直觀の作用的方面を、成す志向作用のみを表象作用と稱し、後者を之と區別したいと思ふ。此意味に於ては表象作用は超越的の對象に關係せざるものであつて、其の關係する所は單にそれが志向する內在的なる對象、一層適切には志向的内容のみに止まる。リッケルトが表象を以て何等超越的の對象を要求するものでないとしたのも之に一致する。併しながら感性的直觀に於て表象せられる内容は本來意識せられるとせられざるに拘りなく存立する本質を要素とし、唯其結合限定のみが事實、但し未だ客觀化せられざる直觀的の範圍に屬するものであり、而も一度結合限定せられて意識せられた内容は不斷發展の意識に於て永久に消えざる閱歷として存續し、爾後如何なる意識發展の段階に於ても同一の内容を其全内容の一部として反覆することが可能であるといふ意味を内含す

る。於此斯かる内容を内面的に自己同一なるものとして統一し、之を意識發展の時間的推移に獨立なるものとして定立し、超時間的の存立を有して現實意識の發展過程と對立するものと承認することが出来る。是れリップスが Denken von と稱した新なる作用であつて、思惟の最初の段階をなすものである。其作用に由つて統一一定立承認せられるものが對象に外ならぬ。今迄單に内容と作用との兩面の融合せるものとして存した表象は此作用に由つて始めて對象に關係することとなる。曩に區別した第二の意味に於て表象といふ語を解し、所謂表象の對象と稱するのは即ち此 Denken von の作用に由つて定立せられる對象をいふに外ならない。これは余が解せる單に ein Zustand unseres Leidens (Lotze, Logik. S. 15.)としての第一の意味に於ける表象の關はる所ではない。マイノングの如きも「表象作用に基いて心的に實現すべき一切のものから全く解放した場合には、Vorstellen は Fühlen と同様に全然受動的なる状態 (passiver Zustand) である」として必ず一の Tun たる對象の把握とは區別しなければならぬことを説いた (Meinong, Über Annahmen. S. 235)°。ゾータークが Aktivität の性質を有する psychische Tätigkeiten を區別して Passivität を本性とする psychische Vorgänge を考へ、後者に感覺表象の作用を屬せしめたのも同意である (Wirasck, Op. cit. S. 85)°

而して此ことは單に經驗的心理學の立場から認められる内省の事實たるに止まるものではなく、先驗的にも深き意味を有することといはなければならぬ。故如何となれば、作用の直接結合をなす純粹作用としての意志の活動はあたかもフイヒテの absolute Thesis des Ich の如く、それのみで現實の意識を成立せしむる事は出来ないであつて、我と獨立にそれ自身の存立を有する非我としての感覺の本質殊に空間的徵表の本質系統を antheitisch に豫想し、兩者の相互制限に由り Synthesis の段階に於て感性的直觀を成立せしめ、フイヒテの所謂 Empfindung = Insiehfindung (Fichte, Grunriss des Eigentümlichen der Wissenschaftslehre. Medicinische Ausg. S. 11.) としての感性的表象を意識するのだからである。その passiver Zustand たり Zustand des Leidens たるは、正に純粹作用の感性的本質に依る制限に因由する。併しながら他の半面から觀るならば此様な内容が意識せられるといふことは已に前節に述べた如く純粹作用の作用結合の發展に於て、當該感性的本質系統を中心に置く結合が無限の可能的結合の中から限定實現せられることを意味し、尙一度中心的位置に置かれて意識せられた内容は記憶に維持せられて爾後發展する純粹作用の作用結合に必ず參加するのである。斯くて感性的直觀の内容は同一の純粹作用に依る限定的統一を豫想すると同時に、直

觀時間的發展を内面的に含蓄して居る。此内面的同一の媒介を通じて内面的相違に於て發展する直觀内容を、論理の根本原則に従ひ自同の關係に於て統一し、内面的に潜在する自同の關係を原理的に顯現して、其恒常性を不斷に發展する現實意識作用に對立せしめるのが即ち Denken von の作用である。而して已に現實意識の發展と獨立なる恒常性を原理的に定立するに由り、その成果は常に直觀的時間を超越するのみならず、現實意識が無限に可能なる作用結合の限定として成立するに必要な條件としての直觀的空間の制約をも離脱して、完全に超個人的なる普遍妥當の意味を有するものとなる。之に由つて始めて意識は自己に對立する對象を有する事となるのである。フイヒテが我は感覺に於て自己の内に發見した制限を反省して、制限者としての非我を直觀し、更に之を反省して其内容が本來構想力に依る自己の所産に外ならざることを見出し、之を一定の法則に由つて固定するその verständigen 即ち zum Stehen bringen の作用を、Verstand に歸したその意味に於て、正しく Denken von は悟性の作用に外ならぬ (Fichte, Grundlagen der Wissenschaftslehre. Medicinische Ausg. S. 425-426; Grundriss. S. 336-337)。溯つてカントが理性批判第一版の Deduktion に於て説いた直觀の Apprehension に由つて内面的の綜合に於て把握せられた多様の内容

が、其綜合に構想力の再現を豫想するものとして其時間上の相違を内面的に意識せしめ、斯かる内面的相違を有する多様の要素の内面的綜合が悟性の法則に従つて合理化せられ、合法的結合として概念に於て再認せられる限り客觀的の對象が成立するといふ手續も、我々は之を感性的直觀の表象内容から Denken von に依つて對象が定立せられる過程の内に發見することが出来るであらう。勿論此過程を單に内省的事實といふ立場から觀るならばリップスの云つた如く、表象内容例へば Inhalt Blau に Aufmerksamkeit 一層精密には Auffassungstätigkeit なる innere Zuwendung を向けることに由り、おのづから此内容に相應する對象例へば Gegenstand Blau が herausnehmen せられる、此作用が Denken von であるといふ以上に何も言ふことは出来ないかも知れない。(Lipps, Op. cit. S. 21-28)° 而してリップスが此場合に Inhalt Blau と Gegenstand Blau とは其 Beschaffenheit に於て異なる所無く、唯我に對する Daseinsweise に於て異なるのみ、 trotz jenes Herausnehmens Inhalt und Gegenstand zunächst inhaltlich, oder hinsichtlich ihres "Was" sich decken (S. 28) と言つたのも一應の道理あることといはなければならぬ。トワルドフスキイが einfache Gegenstände の表象に於ては表象對象の表象内容に對する關係が單に Vorgestellwerden durch den Inhalt に盡せらるゝとするのも同意であらう (Twardowski,

Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen. S. 68) ければ一層精細にフッサールの如く Aktqualität と Aktmaterie とを區別して考へるならば、本來意識せられると否とに拘らず存立するものであつて、意識せられることに由り何等の變化を受けるのではないといはれる本質としての *Bian* が *Vorstellen* と *Denken von* との二つの相異なる作用に對し、その相異なる Aktqualität にも拘らず共通なる Aktmaterie として各の *Aktelebens* に *Komponent* となることを謂ふのであると解することが出来やう (Husserl, *Logische Untersuchungen* II. I. S. 411)。併しながらこの二つの作用が Aktqualität に於て如何に相違するかといふ問題を先驗心理學的に考へるならば、*Vorstellen* に於ては感性的直觀が或特定の本質例へば *Bian* の本質を中心とする感覺的本質系統の限定的結合として成立するに際し、同一なる内容が同一なる純粹作用に依る限定的結合の内に於て内面的に存續することを意味し、而して此内面的に存續する内容の自同性を同一なる純粹作用の發展を通して、その純粹作用に對する *Anstoss* となるものとして自覺するものが *Denken von* であるといふ外無い。自同の原理は此自覺の原理である。カントも理性批判第一版の *Deduktion* に於て、直觀の *Apprehension* に已に構想力の綜合を豫想する事を説いたが (A.S. 118-120) 實際直觀的時間の發展に於て内面的に綜合せ

られる感性的直觀の表象内容は、過去の内容の維持、或はカントの所謂再生を豫想しなければならぬのであるから、具體的には構想力を俟つて直觀が實現せられるといはなければならぬ。此の構想力を通じて實現せられたる直觀の内面的綜合が *Vorstellen* に相當し、而してこの綜合を反省して思惟の先驗原理に従ひ自覺し之を合法的なる綜合に展開するのが *Denken von* である。その所謂思惟の先驗原理とは直接所與内容を自同的として綜合すべしといふことであつて、直接所與として規定せられるものの自同性なる範疇が之をあらはすのである。リッケルトの所謂所與性の範疇といふのも即ち之に外なるまい。而して此場合に *Vorstellen* から *Denken von* が發現するのは、一方からいへば已に表象作用の志向的内容をなす本質結合が其本性上自同性を含蓄するに由るのは勿論であるが、併し他方からいへば單なる本質は *nothwendig* なものであつて *nothwendig* なものではない、それはそのまゝで現實の思惟に對する對象と同一視せられるとは出来ぬ。現實の對象となるには純粹作用に由つて先づ作用の結合を通じて意識の内容となり、更にその意識せられるといふことの基に豫想せられる結合の發展中に於ける持續といふ點から反省せられなければならぬのであるから、此反省を行ふといふことは純粹作用の本性に屬することであつて、自由なる意

志の活動に外ならぬといふべきである。曩に擧げたリップスの *Aufmerksamkeit* 乃至 *Auffassungsfähigkeit* といふ如き *innere Zuwendung* とは即ち之を謂ふのである。併し意志が一度反省を行はんと決意した以上は、その仕方は意志の随意に支配するを許さるものである。一方に於ては内容を成す本質の内面的結合と、他方に於ては思惟の先驗原理とに規定せられて、意志の純粹作用は唯其成果を承認するといふに止まらなければならぬ。換言すれば表象内容はそれが意識せられたといふことの必然の結果として、其意識の基となる内面的の根據を反省して之を展開し、對象の定立に導く力を有するのであつて、意志の純粹作用はその反省を實行すると決意した以上その成果を承認する外無いのである。此處に對象が意志の支配を脱し、意識に對立するといふ意味が成立する。而して又 *Denken von* が思惟の最初の發現として綜合の超越的要求乃至當爲に對する承認といふ意味に於ける判斷の本質を、極めて初發の段階ながらに具備することを認めなければならぬ。余は此判斷を所與定立判斷と呼びたい。

所與定立判断は綜合の超越的要求を承認するといふ點から見て已に判断作用の本質を具へるものではあるけれども、これはすべて他の一層發達せる判断と異り、常に肯定の質のみを有するものであつて、之に對する否定の質を有しないものである。前節に述べたが如く感性的直觀に於て意識せられる表象内容はそれが意識せられるといふ正に其理由を以て、當然其意識の根柢を反省自覺することに由り所與定立判断を發現せしめ、對象の定立に導くのであつて、意識の純粹作用たる意志は唯此對象の綜合定立を承認する外なく、已に反省の實行を決意したる以上、成果たる對象の定立を拒絶すべき餘地は無い。所與定立判断に於ては對象の綜合定立の要求乃至當爲と承認との間に間隔が無の極限に歸して居るのであつて、一層發達した判断作用の特徴となる批判的態度といふ如きものを心理的事實として此判断に指摘することは困難である。唯其極限の場合として承認といふ作用を認める外無い。而して此作用の側に於ける所與定立判断の特徴は正に其志向的内容の側に於ける特徴に相應するのであつて、發達せる判断の志向的内容がマイノングの所謂 *Objektiv* として對象化せられる、相互區別せられた要素の或關係に於ける複合たるに對し、所與定立判断の志向的内容は前述の如く未だ何等思惟に由つて區別せられざる、唯内面

的の相違を有するに止まる所の内容の綜合なのである。我々は此側に於ても所與
 定立判断の志向的内容が要素の複合といふ判断の一般的本質を其極限に於て現は
 し、其の綜合の方法が表象内容から必然に決定せられるが故に、従つて作用の側に於
 て要求と承認との間に間隔を容れないのであると考へることが出来る。果して此
 様に所與定立判断が其綜合の必然的なる爲めに、其要求と承認との間に間隔を容れ
 ず、否定の對立を含まざる絶對肯定判断であるとすれば、これは又必然眞、僞正非
 の對立を超越して絶對に眞正なる判断であると認めなければならぬであらう。従
 つて此判断をなす現實意識は此判断の判断意識たる限り所謂 *das fraglos bejahende*
Bewusstsein überhaupt として認識の規範意識たる意識一般を實現し、認識主觀たる資格
 を有するのであると考へることが出来る。これは或は極めて *annassend* な主張のや
 うに見えるか、或は反對に一見甚だ *trivial* なことに思はれるかも知れない。併し余
 は此處に事實眞理の經驗的認識に對する最後の根據が発見せられるのではないか
 と思ふ。

先づ右の主張を *annassend* な不當なる要求と見做す人は、恐らく感性的直觀の所與
 内容を定立對象化する判断が果して *das fraglose Ja* に依る絶對肯定判断であり、眞僞

正非の對立を超越する絶對眞正の判斷であるかと疑ひ、例へば錯覺の表象内容を定立して之を對象化する如き判斷が偽を含まざるかと反論するであらう。併し此様な異論は所與定立判斷の眞意を誤解する所から來るものと思はれる。如何に錯覺の表象内容と雖も、それが何等か意志の純粹作用に對する制限抵抗として感覺の本質を含む限り、之を對象化する所與定立判斷は眞でなければならぬ。それが錯覺的表象であつたとしても、それに對する命名判斷の客觀的妥當性を否定せられるのは、表象内容として斯かる意味を否定せられるのでなく、表象對象として更に特定の對象界を構成するアプリオリの立場から該對象界の成員たる資格を拒絶せられるのである。單に感性的直觀の内容を對象化する立場からは錯覺たるか否とは關する所でない。とにかく感覺の本質が直觀の統一に結合せられる限り、それは所與界の成員として對象化せられるのである。而して感覺的表象として與へられるといふことは、與へられてあるのかないのかといふ疑を絶して直接に確實なる體驗に屬するものであつて、番に錯覺のみならず、夢幻覺の如きに於ても、尙凡ての思慮解釋(後に説かんとするリップスの語を借れば *Denken von* に對する *Denken über*)を除きて、唯其核たる感覺的表象の所與一般に關する限り、その所與定立判斷は絶對肯定判斷でな

ければならぬ。興へられたる感性的直觀の所興表象はその獨自なる性質に由つて單に想起せられたる表象と直接確實に自己を區別し、それに由つて興へられたるものとして對象化せられるのである。後者が對象的意味を有する場合はそれが嘗て對象化せられた感性的表象の再生たる限り、Denken über に屬する再認の判斷により第二次的に對象性を賦與せられるのであつて、それは全く前者に依存する關係のものである。これが可能なる爲めには感性的表象の對象化が直接に確實なる絶對肯定判斷たる事を認めなければならぬ。リッケルトも所謂所興性の範疇に由つて成立する知覺判斷或は純粹事實判斷が現實に關する唯一の絶對不可疑の判斷なる事を認めた(Rickert, D. Geg. d. Erk. S. 399)。併しながら此事を認めるとして第二にはそれが唯一個の Trivialität たるに止まり、何等重要な意義を認識論に對して有するものではないといふ批評があるかも知れない、斯かる批評を下す人の論據は惟ふに次の如きものであらう。成程凡ての思慮解釋から抽離せられた感性的表象の所興定立は絶對肯定の眞正なる判斷である事を認めなければなるまいが、併し凡ての Denken über から抽象せられた Denken von は唯感性的直觀の所興表象を定立するに止まり、其內的構造に關し何等の規定をなさざる物であるから、我々は之に關して何

等特定の概念を有せず、如何なる立言をなすことも出来ず、畢竟斯かる所與を思惟する *Denken von* は唯直觀と、本來の意味に於ける思惟即ち *Denken über* との間、に其内的構造に於ては全く前者と一致するものを介入せしめるに止まり、認識の根據を明にする上に些の貢獻する所も無いと。併しながら余は此様な批評に對して *Denken von* の所與定立判斷が絶對肯定判斷たることを認め、之を直觀と、*Denken über* としての思惟との間に置くことは認識論の研究に於て原理的重要の意義を有するものなる事を主張したいと思ふ。抑も直觀を直觀として考へる限り、それは認識以前の段階に屬するものであるから、我々はこれに對象と主觀との對立を認め、又その眞理性に關して語る事が出来ない事はいふまでもない。其故直觀に經驗的認識の眞理根據を求め、又相異なる方法的アプリアオリを俟つて夫々の經驗的對象界を構成する *Denken über* が、同一なる素材に關係して其相異なる方面の一面的發展をなすのであると考へるべき理由を其中に求めることは出来ない。批判主義の立場を去つて形而上學的立脚地に移り、直觀に於て何等の *Anstangung* に由つても害はれざる實在がその眞の姿に於て示顯せられるのであるといふ如き主張をなすこと能はざる限り、凡ての經驗的認識の眞理的根據を絶對肯定の眞正なる判斷としての所與定立判斷に置くこと

は、批判主義の立場に於て可能なる唯一の正當なる立脚地であつて、此判断の超疑問的絶對眞正なることが凡ての經驗的認識に對する最後の據り所を供し、批判主義の立場に止まる限り説くことを得ざる直觀の絶對眞實性に代はるものを與へるのである。而して又此所與界の唯一性に由つて方法的アプリアリに從ひ構成せらるゝ自然と文化といふ如き相異なる世界の連絡交渉が保證せられるのであつて、これなしには批判主義の立場を守る限りそれ等の對象界が同一素材の一面的發展として相連絡することを理解すべき道は無いと思ふ。余はカントがプロレゴメナに於て經驗判断に對立せしめた知覺判断なるものの正當なる意味は此所與定立判断でなければならぬかと思ふ。それは已に判断である以上、カントの考へた様に客觀的妥當性を含まざる如きものではあり得ないのであつて、却て絶對的妥當性を享有し、凡ての經驗判断の妥當に根據を與へるものでなければならぬ。其成立には勿論範疇を豫想するのであつて、範疇なしに判断が可能となる譯はない。唯カントが唯一の經驗的認識と考へた自然の法則的認識に對しては其先行段階であるから、従つて其成立に自然認識の構成をなす範疇が豫想せられざることは當然のことであつて、此意味に於てのみ知覺判断に範疇を豫想せずとしたカントの考を正當に理解するこ

とが出来る。カントは認識の客觀性を成立せしむる普遍妥當性を普遍性と同一視し、普遍的法則の自然界を以て唯一の經驗的對象界と思惟した爲めに、先自然科学的認識對象の所與界に對する知覺判斷の正當なる理解を有することが出来なかつたのであらうと思はれるが、方法論的洞察に由つて自然認識に對する文化史的認識の本質を明にしたリッケルトが、兩種認識の分化に先立ち、その素材としての先科學的認識の對象界を認めたのは重要な意味を有することといはねばならぬ。唯氏はその先科學的認識の對象界を以て單に氏の所謂所與性の範疇に由り定立せられた所與界とせず、更に氏の所謂現實性の範疇に由つて構成せられた時空實體、因果の統一を有する世界としたのは余の同意する能はざる所である。時空といひ實體、因果といひ、これ等の所謂現實性の範疇に屬するものは實は自然科学的なり文化史的なりの方法論的アプリオリに由つて始めて一定の意味を有するのであつて、後者を離れてそれ自身に特定の意味を有することは出来ぬ。例へばミンコフスキイの『世界』の第四次元をなす物理的時間と、内面的價值實現の過程に干與して歴史的主觀の人格的統一に於て成立する歴史的時間とを同じく時間と稱するも、誰が其概念内容を同一視するものがあろう。而して時間の概念はこれ等相異なる學的認識の方法論的ア

プリオリに照合はせて之を分化するのでなければ實は正確嚴密に其内容を規定することが出來ないのであつて、然らざる限りは兩方の意味を混合して論理的に一義嚴正の規定を容れざるものに止まらなければならぬ。更に實體因果の如きも、單に一方特殊的部分の總和としての全體が量的同一を保持し、他方其特殊推移の間に函數的關係の成立することを意味する自然科学の場合と、全體が目的を内含して常に部分に表現せられ、部分と部分とが全體の目的實現といふ媒介に由つて結合せられる文化史學の場合とでは、全然其の範疇の概念内容を異にしなければならぬ。これ等の問題は特別の精細なる研究を要求し、少なからぬ困難を豫想せしめるものではあるが、ごにかく右の如き例示に由つても充分推測せられる如く、リッケルトの所謂現實性の範疇に屬するものは實は方法論的アプリオリを俟つて始めて其概念内容を一義的に決定せられるのであつて、之に先だち論理的規定をなす事は出來ないものであると思ふ。眞に方法論的アプリオリを離れて一義的に決定せられるのは所謂現實性の範疇でなくして所與性の範疇でなければならぬ。之に由つて定立せられる所與界のみ凡ての方法論的アプリオリに先だち成立するのであつて、學的認識の凡てに共通なる素材となるものは唯之に限る。リッケルトが其書 *Die Grenzen*

der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung の初に説いた所謂 Heterogenes Kontinuum なるものは論理的にはこれではなければならぬ。若し單に所與性の範疇に由つて定立せられた所與界に止まらず、氏が實際に説く如き時空、實體因果の現實性の範疇に由つて構成せられた現實界なるものを、方法論的アプリオリの規定なしに學的認識の先科學的素材として認めやうとするならば、本來特定の方法論的アプリオリに由つて始めて一義的の意味を有し得べき諸範疇を、斯かる方法論的アプリオリに照合はせて純粹に分化せしめず、相異なる立脚地を混合して範疇を多義ならしむる如き常識の立場を考へる外無い。これは未だ立場を純化せず、異種の構成を混合するものとして、事實上或範圍に於て存在するものではあるけれども、其意義は單に事實的たるに止まり、其限界は動搖して到底論理的に決定することを許さず、一義的なる論理的の意味を有するものとして認識の一段階と認めることは出来ぬ。リッケルトが科學的認識の共通素材として先科學的認識に就いて説く所は論理と事實との混同を含むと思ふ。種々の論議を惹起した氏の個別的因果説の如きも此混同に因由する難點を免れないのである(拙稿『個別的因果律の論理に就きて左右田博士の教を乞ふ』本誌第三十號所載參照)。

所與定立判斷は經驗的認識に於ける合理化の第一段階として合理性の極小を實現するもの之より合理性を減じた經驗的認識の對象界は存しないのである。而もそれが如何に極小なるにせよ、範疇に依る合理性を含む限り、原直觀に對しては課題の解決といふ意味を有するのであつて、全然合理化を受けざる直觀そのものとは概念上明に區別せられなければならぬ。併しながら所與界は曩にも述べた如く其のWasに關しては全然直觀内容と一致するのであつて、例へば Gegenstand Blau と Inhalt Blau との相違は兩者の Beschaffenheitに關するのではなく、唯その D seinsweiseに關するものであるとするならば、感性的直觀の内容に於て掲げられる所の課題は唯所與定立判斷に由つて解決せられたものを除きて、全部所與界に於ける非合理性として無限の解決を要求する課題と認められなければならぬ。その解決が普通の意味に於ける思惟即ちリップスの所謂 Denken über として所與定立の Denken von と區別せられる思惟判斷の負擔する所となる。構成的範疇はこれ等の判斷の意味形式に外ならぬ。而して曩に例示した如く、時空、實體、因果の如き構成的範疇は方法論的アプリアに照合はせて始めて其意味を規定することが出来るのであつて、假令名稱は同一なるも嚴密に論理的規定をなす立場からは概念上自然的と文化史的との兩種に分

化せられなければならないのである。リッケルトは構成的形式と方法論的形式とを峻別し、上記の如き氏の所謂現實性の範疇に屬する諸形式を構成形式と認め、何等方法論的アプリオリを豫想せず、従つて之に基く意味の分化を含まざるものとして、之を方法論的形式に對立せしめたのであるが、余は上述の如き理由に由り之に同意する能はざるものであつて、氏の此區別は論理上維持すべからざるものであると考へる。所謂構成的形式なるものも實は方法論的アプリオリを豫想して始めてその意味を一義的に決定せられるのであつて、其點に於ては所謂方法論的形式と何等異なる所なく、畢竟後者は前者の延長派生と認めらるべきもの唯所謂構成的形式に屬するどリッケルトの考へた現實性の諸範疇は、事實上先科學的常識の段階に於て其方法論的アプリオリに基く意味の分化をなさず、混合、不純、多義の状態で現れることが所謂方法論的形式の純化せられた一義的の意味を有するのと異なるばかりである。而も此區別は明に事實上のそれであつて論理的の意義を有せざるもの、論理上からは所謂構成的形式も必然方法論的アプリオリに従つて純粹に分化せられなければならぬのである。所與性の範疇に由つて定立せられた所與界を合理的に構成する範疇は凡て方法論的アプリオリに基いて一義的の意味を享有するのであつて、余

は斯かるものとして凡て自然と文化史との對象界を構成する範疇を一般に構成的範疇と呼ぶことにしたいと思ふ。所與性の範疇に従つて定立せられた所與界は、一方に於て沒價值的普遍化と、他方に於て價值關係的個性化との兩方向に向つて合理化せられん事を要求する非合理界である。それには斯かる兩方向の解決を求める課題が其兩面として内合せられるのである。曩に余は所與界として定立せらるべき感性的直觀の成立を説くに際し、其内容的構造の方面にのみ注目して、それに相即する價值的體驗に關して何等説く所が無かつたが、今價值關係的個性化の文化史的對象界の構成に對する課題の内含を語るに就いて、一言前の説述に補足を加へる必要があることを思ふのであるが、併し價值體驗の本性は此補足をなすに前の論構を破毀することなく、單なる補足として之を能くせしめることを信ぜざるを得ない。其意如何といふに、價值は凡て意識の志向的對象内容そのものの直接に有する所ではなく、必ず或作用が作用の可能的全體の結合をなす純粹作用の意志的統一に對して有する關係に従つて生ずるものだからである。價值の體系的發展乃至分類を試みることは極めて重要にしてしかも困難なる問題であるが、我々の容易に氣付く價值の著しい區別は、想ふに對象の有する價值と主觀の活動が有する價值、或は對象價值

Gegenstandswert と人格價值 Persönlichkeitswert とも呼ぶべき二種の價值ではないかと思ふ。併し少しく仔細に價值の本性を考へるならば、斯かる區別も右の如き意味では終極的に維持することは出來ぬものであつて、我々は普通に對象の有する價值と稱せられるものも實は對象そのものの有する所でなく、其對象に關係する作用の純粹作用としての意志的統一に對する關係が有するものであることを見るのである。此意味に於て價值は凡て人格的といはれるのであつて、右の如き區別は唯人格の一部としての特殊作用に關するか、人格の全體に關するかといふ如き相違に歸するものであらう。とにかく價值が此様に作用の意志的統一に關するものであるとしたならば、直觀の所與内容は必然價值的意味を内面的に含蓄するものであつて、それは又定立せられたる所與界の内含する所であらねばならぬ。斯かる價值の普遍的なるイデーに關係せしめて價值關係的の文化史的對象界が構成せられること、沒價值的の普遍法則の自然界が構成せられる如く、而も兩界が同一所與界に内面的に掲げられたる課題の解決として連結せられることは、今まで述べた所から我々の當然として理解し得る所である。斯くして自然と文化史との兩對象界は單に所與的の自同者として定立せられたる所與界の内に内面的に含まれる諸關係を、一定の方法論的アプ

リオリに從つて展開し、前者の内含する非合理性を合理化する論理的構成の不斷發展的なる成果として現れる。

構成的範疇に從つて所與を展開し、經驗的認識の對象界を構成する Denken über の思惟は勿論、單に所與界を定立する Denken von の思惟と雖も、それが必然性、普遍妥當性を要求する思惟たる限り、純粹思惟の論理的原則に從はなければならぬことはいふまでもない。從つて諸構成的範疇は勿論所與性の範疇さへも、純粹思惟の範疇を豫想するといはなければならぬ。斯かる純粹論理的思惟の形式概念をヴィンデルバントに從つて (Vgl. Windelband, Vom System der Kategorien. S. 49) 反省的範疇と稱し、之を構成的範疇に對立せしめるならば、反省的範疇は構成的範疇に豫想せられ、後者は前者がその解決すべき課題により方法論的アプリオリに從つて特殊化せられたものであるといふことが出来る。已に所與性の範疇に就いてそれが所與的自同を意味する形式概念として、その成立に論理的自同の範疇が豫想せられることを前節に述べたが、構成的範疇の如何なるものと雖も、其成立に論理的自同、區別の範疇を豫想せぬものはない。其他普遍と特殊、全體と部分、系列順序、理由と歸結等の純粹思惟の反省的範疇も、自然的及び文化史的時空、實體、因果等の構成的範疇に豫想せられ、後者

は方法論的アプリオリの示す認識目的に應じ、所與界に内在する課題に従つて前者が特殊化限定せられたものと考へられる。勿論兩種の範疇を論理的に展開し、相互の間に對應の關係を立し、所謂範疇の體系を建設することは範疇論の重要にして困難なる業に屬するのであつて、此様な斷片的一般論を以て問題を解決し得たりとせず如きは許されざることであるが、とにかく兩種範疇の間に右の如き對應の關係がある事は否定出来ないと思ふ。此場合ツインデルバンドが兩者の特色を規定して、(氏が兩種の範疇に屬せしめたものの如何なるものなるか、其他種々の細點に關して余の上に述べた所と一致しない所があるか、どうかといふ如き問題は今措いて問はない) 構成的範疇は意識がそれと獨立に存在する内容に本來屬する所の關係を *annehmen* し *wiederholen* する形式であり、之に反して反省的範疇は結合をなす所の意識に由つて結合せらるゝ限りに於て内容相互の間に現れる關係を意味するのであると云つたのは (Op. cit. S. 48)、恰もクリースが其著論理學に於て判斷の根本種別として *Realurteil* と *Reflexionsurteil* との二種を説いたのと (Kries, Logik. S. 1-5) 其軌を一にするものと思はれるが、此様な對立の半面に前述の如き相應の關係が存する事を觀過してはならぬ。經驗的實在論に立つ我々の常識に對しては構成的範疇は意識と獨

立に存在する對象の關係を把握する實在判斷の形式であり、之に反し反省的範疇は斯くして把握せられたる對象の表象を更に意識が抽離結合する形式であるといふのは否定すべからざる心理的事實である。併しながら一度批判主義の立場に立つならば、意識の綜合に先だち之と獨立に存在する内容の關係なるものは考へることが出來ない、それは意識の合法的綜合に由つて始めて成立するものである。而して其合法的綜合には却て反省的範疇の純粹思惟形式が豫想せられるのである。現實界の構成といふのは所與に内在する課題を純粹思惟の反省的範疇を以て解決せんとする無窮の過程を謂ふのであつて、其構成に與る構成的範疇は、反省的範疇の所與内容に由つて特殊化限定せられたものでなければならぬ。唯我々が反省的範疇を反省的範疇として思惟するときには構成的範疇の有すべき限定を抽象し、之を不定にして前者を反省的に思惟するが故に、之を後者の主觀的變容の如く思ふのである。斯くて我々にたいしては構成的範疇が先で反省的範疇が後であるが、理の上からは (dem Logos nach) 却て前者が後で後者が先である。唯現實界は無限の構成過程に對する極限として一義的決定を意味するものであるが故に其規定形式も客觀的の考へられ、之に反し純粹思惟は規定せらるべくして未だ規定せられざる普遍の概念を

對象とするが故に主觀的自由の結合作用にして、其綜合形式たる反省的範疇はヴィンデルバンドの所謂對象的妥當性 (*gegenständliche Geltung*) を有せず、單に表象せられたる妥當性 (*vorgestellte Geltung*) を有するに止まる (*Windelband, Op. cit. S. 48*) 如く見えるのである。これは心理的事實として争ふべからざることであるが、論理的意味の立場からは其半面に存する關係即ち不定の普遍は規定すべからざるものでなくして、却て規定せらるべきもの、即ち規定せられたるものに對して先なるものであるといふ關係を重視しなければならぬ。勿論認識論上の汎論理説が維持せられない限り、構成的範疇を純粹論理の反省的範疇のみから導き來ることは出來ない、前述の如く特定の認識目的に照らし合はせ、所與に内在する課題に従つて特殊化限定せられなければならぬ。併しながら其理由を以てラスクの如く「凡ての非構成的形式は構成的形式から、後者の單なる人爲的複合稀薄化として理解せらるべく」、それには「反省的主觀性に由つて生せられたる人爲性」が附隨するとするのは (*Task, Die Logik d. Phil. S. 67*)、未だロゴスの眞髓に徹せざる見解ではないかと思ふ。余は反省的範疇の普遍が特殊化限定せられて構成的範疇となるもの、而して構成的範疇の自然的、文化史的二種別を貫き、所與性の範疇に至るまで反省的範疇が其内にはたらかなければならぬ。

らぬことを信するものである。

構成的範疇が右の如く所與に内在する課題を方法論的アプリアリに照合はせて解決し、所與の非合理性を合理化せんとする無限の思惟過程に對し其合理化の形式となるものであるとするならば、此範疇に由る Denken fiber の判斷に所與定立判斷に於けると異り、一般に課題と解決との不適合 (Inadäquanz) としての虚偽が現れ得ることとは容易に理解出來るであらう。勿論課題といふも思惟に對する課題は思惟と全然無關係に掲げられるものではない、それは思惟自身に由つて要求せられたるものなる限り思惟に對する課題となるのである。併しながら思惟の解決の種々の方法に相應する種々の課題が同一の所與に即して掲げられるならば、其處に課題と解決との錯雜を生ずる可能の存することは承認せられなければならぬ。感覺的表象内容の意識せられるといふことは必然に之を自同的所與として對象化することを要求し、此要求に従ふことが即ち課題の解決に外ならないから、同一内容に掲げられる課題は唯一であつて、その解決も之に應じて唯一であり、課題と解決との間に不適合を容れる間隙は存しない。是れ所與定立判斷が絶對肯定の超虚偽的判斷なる所以である。然るに構成的範疇に従ふ經驗的對象構成判斷の場合には、先づ同一所與

に即して掲げられる課題が認識目的を示す方法論的アプリオリの相違に従つて多様であるから、解決の方向と認識目的との間に不適合が起り得るし、次に假令解決の方向が認識目的に適合するも、所與定立判断の場合の如く唯感覺的表象内容を所與性の範疇なる唯一の範疇に由つて定立對象化するのでなく、此場合には複合的なる所與を分析し、その含む種々の内面的關係に適合する種々の範疇に由つて對象を構成するのであるから、同一認識目的の下に於ても所謂範疇材料と範疇内容と形式との不適合が起り得る譯である。斯くして經驗的對象構成の判断に於ては虚偽の現れる機會が充分に存するのであつて、之に對する判断主觀は唯眞正の判断をなす限り認識主觀としての意識一般と認められるのである。今や余は感性的直觀の成立から所與定立判断を経て經驗的對象界構成の過程を概觀したので、其結果を念頭に置きて再び當初の問題たる認識主觀に立歸り、之に對する大體の考を纏めたいと思ふ。(未完)